しんらばんしょう

全面教育学研究会通信

2010.9.1　No.3

《６月例会報告》

「 竜 と は 何 か ？ 」

自分なりの概念を作るための 庄司和晃 論理学講座

日常体験の蓄積を経て、自分なりの抽象化への道筋をさぐる。頭の中を整理して様々な体験を取捨選択し比較検討しながら、自分なりのものの見方を築いてみよう。

参加者：植垣一彦、向井吉人、小田富英、庄司和晃、波田地翔（初参加）、徳永忠雄

竜とは何か

ミニ三段階論文作り

庄司 和晃

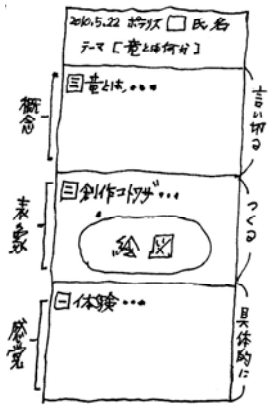
我々は、人の意見や考えに左右されやすい。あるいは人の言動を自分の考えのように思いこむこともある。つまり「人のふんどしで相撲をとる」ことがままある。人の認識を自分の認識と勘違いしていくといずれは齟齬や食い違いが起きることは必至だ。説明も十分にはできない。

全面教育学の認識はあくまでも自分が導き出した認識である。その認識を確固たるものにするための思考法が論理学といわれるもので、平たくいえば考え方の筋道を思考することなのである。

もちろん自分なりの認識が重要といっても我田引水的な勝手な思考を意味するのではない。あくまで各々の「固有の体験」という素材を並び替えながら整理し、自分の感性にヒットするように収斂させていくのだ。その認識は社会性をおび、他人に理解されるものでなければならない。今回の庄司先生の講義を聞き、その思考の筋道を日常的にどのようにするかというヒントをもらったような気がする。

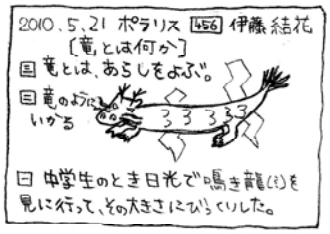
「竜とは何か」は、今年５月のポラリス看護学校での授業の一こまを紹介したものだ。看護士を目指す人が認識論を学ぶのは、広い意味で他者を理解する筋道を持つということで重要な武器になるだろう。この場合の「竜」は他のものに置き換えられ、常に一般化するためにある。

物事を捉えるときに何が重要かというと、まず自分の中に混在する意識的なもの無意識的な体験を感覚的な捉えから自覚的に捉えることだ。



竜の場合、自分の固有な体験を意識的に竜の絵を描くことで、自覚的になるという筋道をたどることができる。そこにキャプション的な「創作コトワザ」を添えることで絵の意味が位置づけられる。その結果「竜」につい

ての捉えという認識が発生するのである。



最初にも言ったが我々はいきおい人が整理した「抽象概念」でものを語りやすい。しかし思考の筋道を自覚し日々の生活で応用することで認識の力は磨かれる。上に紹介した伊藤さんの「竜とはあらしをよぶ」という認識は納得のいく深い捉えであったと思う。

今回残念なのは、参加者が少なかったことである。我々も満を持して準備をし、庄司先生もわざわざ成城からお茶の水までおいで下さったので、若干５人ほどのメンバーで共有するのはもったいないと感じた次第である。

庄司和晃論

～子どもの詩にふれて思うこと（その一）をめぐって～

植垣　一彦

前会年報の報告会で紹介できなかった植垣さんの子どもの詩を通した庄司和晃論である。まずは小二の詩が冒頭に登場する。

かんからの中のおたまじゃくしは
ぼくがいじると、
すぐ草の中にかくれる。
ぼくがかんからをゆすぶると、
すぐぴんとはねる。
おたまじゃくしが、
かんからにくっつくと、
かんらにうつって、
二ひきいるみたいだ。
おたまじゃくしに手と足がはえると、
かえるになるんだね。

（成蹊小２年北上浩治）

昭和３０年、庄司さん２６歳の時で二年生の「文学」の時間に詩を紹介した授業だ。植垣さんは、庄司さんの詩の選び方に注目する。日本中の子どもの詩から観察眼の鋭い作品を見つけてくるのだ。ここには自然現象を観察する子どもの目を見ている教師がいる。さらに、いじったりゆすぶったりという五感を使った観察が子どもの認識の萌芽だと見ている庄司さんがある。

さらに２年生の子どもがおたまじゃくしがかえるになる道筋を観察によってたどる思考過程を検証することによって認識論を築こうとする姿がみえる。

庄司さんは､詩群を次のように分類する。①先生が喜ぶ詩、②子どもたちが喜ぶ詩、③子どもと先生が喜ぶ詩の３つだ。植垣さんは「意表を突く分類」という。というのもこの頃庄司さんが生活綴り方のたくさん作品が、「大人の満足、大人が喜ぶためのものに終わっていやしないか」と語っているように、教師や学校教育の仕事を相対化する視点が見られるという点に呼応する。

さらにここには子ども達とともに発見したり喜んだりするという教師の立場が明確に表出されているともいえるだろう。

我々は、庄司和晃論に自分を重ねることによって単に後塵を拝するのではなく、自分の姿や生き方を軌道修正したり再確認することができるのではないかと思う。

常用漢字にもの申す

常用漢字は、戦後国語改革の亡霊ではないか

向井　吉人

東野圭吾の『流星の絆』、流行歌にある『湖畔の宿』、ここの「絆」と「畔」はともに「半」を持っているが、よく見ると字が異なる。旧字は「絆」の右側の文字だが

活字には出てこない。ところが、小学生も高学年になるとこのような文字の微妙な変化をしっかりと把握して教員を困らせることがあるという。

問題は使用している文字が国語審議会で認可されていようがいまいが様々な形で文字が流布されていることにある。今回も国語審議会はこの秋から１９６字をを常用漢字として認可した。この中には「茨」や「岡」「媛」などがありこれで都道府県の文字はすべてカバーできるということになった。しかしこのような状況は後追いにすぎない。つまり国語審議会は世の中の情勢を見て使い頻度が高くなっているものを認可しているにすぎないのである。

「…どういう判断で削除したり、追加しているのか、そもそもそんなことができる組織って何なのか。常用漢字ではにからといって使ってはならないというほどの制限はないし、今までだってたくさんの常用漢字以外の漢字がメディアやワープロパソコンで使われてきているのではないか。「漢検」が難読漢字を出題して、大もうけをしているっていうのに、一言もないのはどういう了見だっているの！」とレジュメを読むと向井先生は不愉快きわまりない様子だ。

だいたい戦後の国語審議会では日本語をなくしてしまおうなんていう発言も出たという前科もある。漢字をもっと減らしてしまえ！という意見もあったという。中国では漢字を簡略化してしまったために、本来持つ漢字の意味や歴史的背景も喪失したと聞く。漢字の歴史を未だに保存している物持ちのよい我々の先祖に感謝し、国語審議会の漢字小委員会の答申はあまり真剣に受け止めないほうがいいような気がした。

◆会員の今沢正史さんからのブログ開設のお知らせ　三段階論文の小論文集だそうです。アドレスは、http://ameblo.jp/imazawamasasi/

「ハレ」と「ケ」の自覚

徳永　忠雄

私のレポートは、先の林間学校での子どもたちのバスの中で延々と続いた怪談話の話を紹介。林間学校という「ハレ」の場で発見した子どもたちの意外な面を紹介しながら、日頃彼らに話している「ハレ」と「ケ」を再検証したという報告である。『明治大正史世相編』によると、すでに柳田國男は、「ハレ」と「ケ」の意識は、人々の中で薄まっていると感じていた。昭和初期の印象であるから、平成の今はいうまでもないことだが。このことを自覚的に認識することはムダではないだろうと思う。

『遠野物語』１００年

ＴＢＳラジオにも登場

小田　富英

『遠野物語』発刊から１００年の年に小田さんは各地で講演活動を行っている。今回は柳田の出生地福崎での講演の模様を伝えた冊子が配られた。

しかしなんといっても出色は、今年の夏ＴＢＳラジオでオンエアーされた柳田國男特集でのインタビュー出演である。番組は爆笑問題の「日曜サンデー」。折しも８月８日は柳田國男の命日であった。本研究会では、小田さんが柳田の言葉として、成城学園の職員室で「子どもの騒音を集めなさい」ということを雑談の中で言ったそうだが、そのことを裏付ける発言が小田さんの後に生出演した庄司先生と太田光との丁々発止のやりとりの中で浮かび上がってくる。柳田國男の弟子と称された庄司先生を思いながらじゃあ我々は柳田國男の孫弟子かな、と勝手に思った次第である。

【ラジオ採録】

太田：（柳田さんの教科書作りの）メッセージとはどういうもんですか。

庄司：一番重要なことは、良い選挙民を育てようということですな。

太田：民主主義ってことですね。

庄司：そのためには子どもの時からちゃんと判断できる子どもを育てたい。

太田：自分の頭でね。

庄司：…その時に驚いたのは、柳田さんの口からひょろひょろと単元が出てくるんですね。１年生、それはまず道っていうのを教えなければいけない。（田中：道路！）そこで川にぶつかったらどうするかということを考えさせる。…そこから２年生では遠い近いを教えなければならない。古い新しい、そして相対的に判断できることを教えなければならない。ハレの食べ物、年中行事…６年生になったたら「人の一生」を教えなければならない。民俗学をやっていたから分かるんですね…

太田：すごくわかりやすいですね。

太田：僕なりの解釈では、自分の道から世の中をどう見るかっていうことですよね。教育というのは権力だったんですよね。だからある学説が定番になっているけど柳田國男のすごいのはそれを疑ってかかる、それを学問にまで引き上げる。それを一回違うんじゃないか、疑って足で稼いで。それが科学ということですね。間違っていてもとにかく自分の頭で考えるということが伝わってきます。

庄司：そうですか。いいひとことですね。（田中笑う）柳田さんもそのことを思っていたようでした。だから勉強の方法でも、子どもたちの疑問を大切にしていたようですね。歴史などでも昔はどうだったのかということを考えることですね。

太田：今聞くとそうかと思うけど、当時の弾圧の中でそういう発想ができるということは勇気ですね。庶民の歴史を調べようという発想は柳田國男の特別性だと思うよね。

田中：柳田さんというのはふだんどういう人でしたか。

庄司：散歩をすることが好きな方で、成城学園の先生の部屋によく来て講釈されましたね。

田中：ハイカラな人だったんですね。

庄司：その頃家に訪ねたら珍しい水洗トイレがありましたね。…　（以上、部分的に編集しました）

次回　全面教育学研究会

日時　１０月２日（土）
14:00～17:00

場所　お茶の水　喫茶「アミ」
(03-3291-0247)

内容　三段階連関理論の深化
そのほか持ち込みレポート

事務局　徳永忠雄090-8721-5517